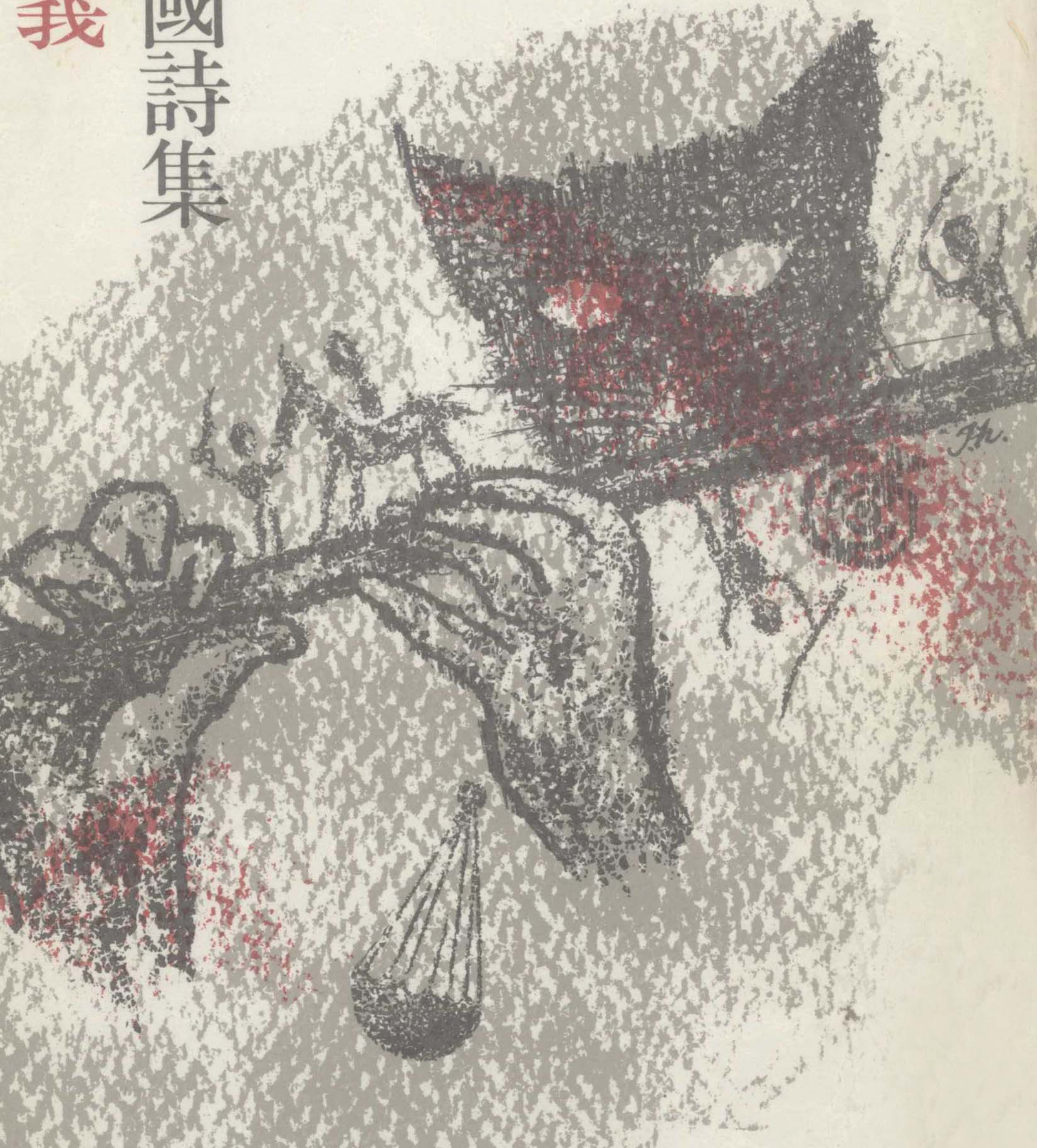
崔華國詩集

猫談義



崔華國詩集　猫談義

花神社

著 者

崔華國

1915年　韓国慶州に生れる

1978年　韓国語詩集『輪廻の江』ソウル白鹿出版社

1980年　詩集『驢馬の鼻唄』詩学社

現 在　同人誌「風」「西毛文学」「東国」同人

日本現代詩人会会員

現住所　東京都台東区池之端4―16―11―72　〒110

＊詩集　猫談義（ねこだんぎ）

1984年9月20日　初版1刷©　　1985年6月14日　初版3刷

定価2000円

著 者　崔華國

装 幀　林 立人

発行者　大久保憲一

発行所　株式会社　花神社（かしんしゃ）

東京都千代田区猿楽町2―2―5　興新ビル605　〒101

電話　東京・291・6569　振替　東京 2―194949

印刷・工友会印刷所

製本・松栄堂　用紙・文化エージェント

0092―840122―1092　Printed in Japan

目 次

ポプラ頌　6
昆虫記　12
猫談義　16
メイド・イン考　20
相似性　26
舞い　30
愁訴　34
夜半の客　38
諺　42
高校野球を十倍愉しく見る方法　46
バカンス　54
シリコーンの指　58
同人善哉　62
帰心　66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

哭金素雲 68
偶成二篇 70
李朝二題 74
襤褸還郷 80
晩秋の旅 84
亜米利加駆け歩記 88
エア・メール 100
からっぽの都 108
十字軍 112
バラと時間 116
好好 120
歳月 122
あとがき 126

猫談義

ポプラ頌

——富士には月見草がよく似合う　太宰治

——ポプラには鵲がよく似合う　愚案

空港の端に整列している背の高い樹々は
あれはまさしくポプラではないか
機窓から眺める見馴れた光景に眼を疑った
機がなにかの都合で金浦に引き返したのだきっと
飛び立って十九時間北極廻りで着いたはずの
ここは巴里のオルリ空港のはずなのに
時差ボケで恍惚になったのだろうか私は
これではオリルにオリラレヌではないか

巴里にポプラがあるとは考えてもみなかった

私の生の幻影の中に常にポプラがあった
国が滅びた時もポプラは青々と若かった
江畔も渡し場も湖畔も丘も村落も街道も
ポプラのない景観が考えられようか
私が餓鬼の頃初夏の宵なぞ
潮騒のように押し寄せる蛙のコーラスと
風に鳴るやさしいかの葉音を子守唄に育った
凡百の霊感に勝る夜もすがらサラサラと鳴る
ポプラの愛の唄

私の里が原産のはずの懐しいこの樹木の姿を

文明の原産地のごとき巴里でお目にかかるとは
そればかりかヨーロッパの行く先々の
風景は総てポプラでもっているではないか
ローマにナポリにマドリードにセビリアに
セルバンテスはドン・キホーテとサンチョパンサの
銅像の背景にはポプラが聳え立つことを
察知していたのだ　さすが

アムステルダムの運河にも風車と吊橋にも
雲を衝くポプラの青の垣根は欠かせない
北海から吹きまくる強風には弓なりに撓り
そして立ち直る強靭さは国造りの名手
ネーデルラント人気質そのものではないか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ロンドンではさらに驚いた
あの厳(いかめ)しいバッキンガム宮殿の裏のポプラに
羽も鮮やかな鵲が飛び交っているではないか
――ポプラには鵲がよく似合う――
幻視ではない擬う方なき私の里の鵲なのだ
旅の疲れも忘れてなんと胸ふくらむことか

里では昔から鵲は吉鳥と言い伝えられている
朝まだきポプラの巣から飛び出た華奢な姿が
今朝は誰の家の屋根で啼くだろうかと
人々は心の中で希い占うのだ
己が屋根で爽やかな声がキャッキャキャッと啼けば

家族達は顔見合わせて喜んだものだ
きっと嬉しい便りがくると信じたものだ

鵲とポプラの不可分の関係は
荒涼たる冬景色の中でこそ判然とする
箒を逆さにしたような裸木のポプラに
ボウルのような鵲の巣が鈴なりになり
木枯の中で大きな風鈴のように
ウィンウィンと大陸の冬の讃歌を奏でるのだ

昆虫記

早朝フィラデルフィアを発ちトアンダに向かう
ハイウエーを走行中突然激しい腹痛に襲われる
昨夜のアイスクリームと西瓜が祟ったのだ

征露丸を倍々ゲームで呑んだが効き目がない
そのはずここは米国　征米丸でなきゃ効くはずない
それにしても三八式銃の時代の丸薬で
ロケット時代の旅に備えた私の頭の古さよ

苦笑どころではない事態は愈々急
違法は承知の上で車を片側に寄せてもらい
腹部に被弾したゲリラの兵士の恰好で
路辺のトウモロコシ畑に一目散に駆けこむ

しゃがんで急場を凌いだのも束の間
グラマン戦闘機のような爆音をたてて
糞蝿の大群の来襲である
さすがアメリカ　蝿の世界まで情報の早いこと
それが地にある豊饒な糧には目もくれず
お尻を這いずり舐めずり噛む奴までいやがる
柏の葉を毟って追えど払えどしつっこさったら
ホモの先進国と噂にゃ聞いたが蝿までとは

泰然自若の東洋の君子もこれにはおったまげた
それにしても不可思議なことよ
貧しい亜細亜のどこかの国ならいざ知らず
富める国のこの広大無辺なトウモロコシ畑を
まさかヘリで人糞の肥を撒くはずもなかろうに
するとあの獰猛な色情狂の蝿群の実体は何か
ハイウエーのリズムにまどろみながらふと
古めかしい戦争にも細菌が使われた
コンピューターが昆虫を使うことは屁の河童さ
私の特異体臭が嗅ぎつかれないはずがない
地政学的に私はスラブとは陸続きなのだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com